Ⅱ. 農地で発生する地域有機資源(3)屑大豆

1. 特性

屑大豆は、土壌中での分解が比較的早い有機物で、窒素が約6%含まれ、水稲栽培では、そのうち約8割(窒素約5%)が緩効性肥料と同様に徐々に有効化し、化学肥料の使用量削減につながります。

表5 屑大豆現物100kg中に含まれる成分量(kg)とC/N比の一例
(滋賀農技セ調査 1992年)

窒素 N	リン P_2O_5	C/N比
5.7	0.6	7.0

注)C/N比は炭素含有率を40%と仮定した場合の値。

2. 期待される施用効果

土壌改善効果	肥料効果	炭素貯留効果	入手しやすさ
小	大	小	◎

3. 施用方法

施用量の目安	70kg/10a (化学肥料の約3~4kgN/10aに相当)
施用法と施用時期など	水稲栽培前の春に、ほ場全面に均一散布する。
その他留意点	○すき込み時期が早いと、窒素の損失が多くなるとともに、発芽する場合があるので、すき込み時期は注意する。 ○屑大豆の施用量に応じて、基肥の窒素施肥量を減らし、穂肥は標準量を施用する。

4. 活用事例

湖東地域のA農業法人では、屑大豆を水田に50~60kg/10a施用し、水稲の基肥の減量につなげています。

水稲栽培前の春において、倒伏しにくい品種や多収米を作付けするほ場を優先的に選択し、ブロードキャスタで散布した後、すき込んでいます(写真4)。

写真4 ブロードキャスタによる屑大豆の散布